

浄土

monthly JODO

4

2018
April

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



高さ210ミリ、首の部分が割れ修復してある。頭部と体の色合いに微妙な違いがあるのは、衣装が彩色されていたせいだろうか。紅色がかすかに残っている



骨董市で真贋を気にすることなどない。どうせ買うのは安物である。贋作など作られるものではない。しかしこの陶俑は迷った。わたしでもちよつと無理すれば手を出せる値である。そこが怪しい。「これは本物かね」と聞いてみる。親父は自信たつぷりに「本物。発掘品だよ」と言う。「いつ頃のもので、場所は」とさらに尋ねると「それは分かんねえなあ」と頼りない。ずつと昔にやはり骨董市に陶俑が出ていたことがある。頭部だけの残欠で、値段は九〇〇〇円だったか。とても手を出せる値段ではない。店主に断って写真を撮り、骨董に詳しい知人に見てもらった。「実際に見

ないと分からないが、たぶん本物だと思うよ。値段的にも妥当なところだろうね」とのこと。無理してでも買っておけばよかったかと、少し後悔した憶えがある。中国の陶俑の歴史は古い。古代中国の権力者が死んだときに、殉死として多くの奴隷が殺され、ともに埋葬されるといふ制度があったが、この殉死を陶俑に替えるようになった。陶俑の種類は多岐にわたる。兵士や武官、文官、侍者、楽人、農夫といった人間のみならず家畜や日用品、建造物まである。わたしたちを驚かせたのは、秦の兵馬俑であろう。実物大で作られた兵士や軍馬のリアリズムは圧倒的である。

さてこの陶俑だが、首の部分が割れて修復されているし右手首から先も欠落している。経年で全体が摩滅しており、彩色が施されていたかどうかよくわからない。衣装にはかすかに紅が残っている。モデルは文官なのかも知れないがよくわからない。摩滅はしているものの表情はよくわかる。この憂いを帯びた表情にわたしは魅せられ、偽物でもかなわないやと、思い切つて買うことにした。真贋など気にすることもない。ひとつでも惹かれる要素があれば、それで充分だと思うのだ。

港区・虎ノ門

天徳寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



平成十七年四月に先代住職藤本泰弘師によって落成された光明山和合院天徳寺の本堂は八角二層の本堂だ。左は藤本泰史第四十九世住職。





天徳寺内陣は正八角形で、二層の明かり取りがあたかも人天蓋に見えるよう美しく設計されている。



天徳寺本尊、阿弥陀如来座像。仮本堂に安置されていた像を本堂落成に合わせ修復したもので、光背、仏天蓋、台座も新調された。

江戸時代の古地図に描かれた天徳寺。
愛宕山に沿った長い境内地だったことがわかる。

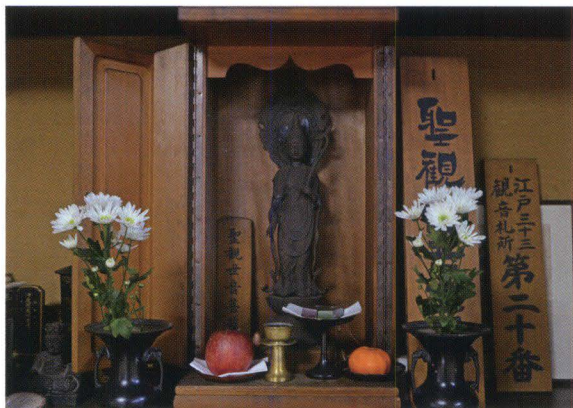


右奥の高層ビルが東京の新名所のひとつ虎ノ門ヒルズ。手前左手のベージュの建物が天徳寺の納骨堂。

以前は仮本堂、現在は客殿となっているこの建物は、大正時代に建てられている。戦災や震災を免れてきた。



客殿内部。右手が位牌壇で、左手に札所本尊の聖観世音菩薩像が祀られている。

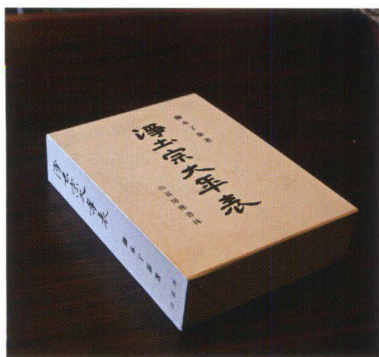


天徳寺は江戸三十三観音霊場の二十番目で、山門脇に「西之窪観音」の石碑が立つ。朱印を求める人が絶えない。左は客殿に安置されている札所本尊の聖観世音菩薩像。



港区の有形文化財に指定されている、阿弥陀種字の碑。

港区の有形文化財に指定されている阿弥陀如来三尊像のうち、阿弥陀如来像。



先々代藤本了泰住職が編纂した『浄土宗大年表』。浄土宗にとって貴重極まりない一冊である。

浄土

2018/4月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 港区 虎ノ門 天徳寺	写真=真山剛	1
特別編 法然上人と親鸞聖人 後編	佐々木正	6
寺院紀行 港区 虎ノ門 天徳寺	真山剛	16
連載 響流十方	小村正孝	22
連載 江戸の川を歩く①9	森 清鑑	26
連載小説 渡辺海旭86	前田和男	30
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	35
編集後記		36



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙写真=鬼海弘雄

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

特別編

講演概録

〈後編〉

法然上人鑽仰会主催講演会

平成二十八年六月二十日

増上寺慈雲閣

法然上人と 親鸞聖人

佐々木正

頼朝の側近の「津戸の三郎」という人物がいます。石橋山の合戦のときから頼朝の身辺警護にあたる武士だったのですが、京に逗留中に熊谷から話を聞いたのですぐ、吉水の法然上人を訪ねたわけです。

そして、熊谷のときと同じように、「念仏一つ申せば、どのような悪人も浄土へ往生できる」という説法を聞いて、念仏を申す者になり、意気揚々と鎌倉に帰ってきました。

そうすると、鎌倉で一つの流言、うわさを聞きました。これを聞いた「津戸の三郎」は驚愕しました。どういいうわさかというと、「熊谷直実や津戸の三郎は、学問がない、無知の者であるから、法然上人は誰にでもできる容易な方法である念仏を教えた。熊谷や津戸に知恵があれば、法然上人は、もっと難しい、難行の道を教えたに違いない」というものでした。

法然上人は、「どのような者も、老少善悪を問わず、念仏一つで助かる」とおっしゃったので、それを信じて、念仏者になったわけですが、これは、津戸に不安と動揺を起こさせました。

私たちが生きている社会では、難行を尊ぶ価値観で生きていることが多いと思います。例えば、オリンピックがあると、そこで金メダルをとると、国民の賞賛を浴びます。学問の世界でもそうで、ノーベル賞をもらったりしますし、音楽の世界でも、有名なコンクールで優勝すると国民的な人気を得ることができます。

ですから、私たちが生きているこの社会は、困難な方法にチャレンジする人を尊ぶ、困難な道を成就した人を賞賛するという価値観で満ち満ちております。

そのため、津戸や熊谷は無知の者だから、法然上人は安易な方法を教えたんだということ、津戸を不安に落とし入れたわけです。

そこで、津戸はすぐに法然上人に手紙を書き、「鎌倉でこのようなうわさが流れているけれども、どういうことなんでしょうか」と尋ねました。

そうすると、法然上人は驚愕しました。それまでは、「念仏を申せば、間違ひなく浄土へ往生できます」と言っていたのですが、その間を知ったとき、念仏の土台が瓦解したということです。

私は、法然上人の伝記をずっと読んでおりまして、あるカルチャーセンターで、六年かけて二回読みました。そして、口語訳をずつとしていつて、二回目のときに、このことに気づいたわけです。

なぜかという、法然上人が、その流言を流す側に向かって、法然上人らしくない言葉で批判していたのです。「仏法に縁のない、せんたいとものがら闡提の輩である」というように、あの温厚で、本当にゆつたりと全てのことを包み込むような法然上人が、激しい言葉でこの流言に対して批判しています。

法然上人がこんな側面を見せたというのは初めてのことで、もちろん、法然上人は、内面は大変強靱なものを持っておられますが、表向きは本当に穏やかで、円満な姿を見せておられます。

ですから、そういう内面の剛毅なもの、強靱なものは、ほとんど見せたことはないけれども、このときだけは、その流言に対して激しい言葉で批判しておられます。

そして、「この流言によつて、念仏の土台が崩れてしまう」ということを直感して、そのとき法然上人は、ご自身を「愚痴の法然房、十惡の法然房」と名乗つたのです。つまり、その名乗ることによつて、私は、「津戸の三郎」の疑問が氷解したと、私は思つております。つまり、それまでは、説法として自力と他力の区別がついてないということがあつたかと思ひます。そのことが一番象徴的にあらわれているのが、黒田聖人に与えた法語で、「一紙小消息」と言われるもので、浄土宗ではこれが大事にされていると思ひます。これを読んでみます。

「本願に乗ずることは、ただ信心の深きによるべし。受け難き人身を受けて、あい難き本願にあひ、おこし難き道心をおこして、離れ難き輪廻の里を離れ、生まれ難き浄土に往生せんことは、喜びの中の喜びなり。罪は十惡五逆の者も生まると信じて、少罪をも犯さじと思ふべし。罪人なお生まる、いわんや善人をや。行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべし。一念なお生まる、いわんや多念をや」

ここには、まだ自力のにおひが多少はありますね。「信心は深さと厚さがある。罪人だつて生まれるのだから、どうして善人は生まれないことがあるうか。一念でも生まれるのだから、多念のほうが優れている」ということで、まだ自力が混ざつていいると言へるかと思ひます。

だから、法然上人は大らかに語られたから、いろいろなことまで語られていいると思ひますが、やはり、「津戸の三郎」の疑問にあつて、そこで、大きな転回をされたといつてもいいと思ひます。

それが、最後の遺言と言われている「一枚起請文」で、皆さんもよくご存じだと思います。

この最後というのは、亡くなる二日前に、側近の、愛弟子の源智が、法然上人に遺言をお願いして、法然上人が書かれて、手判、手で判を押すという形になっています。

それを読んでもみます。

「念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚どんの身になって、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、只一向に念仏すべし」

ここに、法然上人の結論と申しますか、念仏の教えの究極の表現というものが結晶していると思います。

法然上人の生涯をずっと振り返っていく、学んでいくときに、この「津戸の三郎」の疑問に出会ったところが、大きなターニングポイントになっていたと、私は受け取っています。

そして、この疑問に出会うまでの法然を、前期法然、それ以降を、後期法然、というように分割することによって、後期法然で法然の信心、信仰を学ぶことによって、親鸞聖人を理解することが出来ると思うのです。

これまで、法然上人についていろいろな捉え方があって、法然上人は「悪人正機説」は唱えていないと言っている浄土系の学識者もおられます。

いろいろな説があつていいのですが、この説は、親鸞関係の資料からしても、全部法然

上人の言葉となっております。

明治以降の経緯で「歎異抄」が脚光を浴びたということもあって、親鸞の言葉とされておりますが、間違いなく「悪人正機説」は法然上人の言葉です。

この「悪人正機」を法然上人の言葉とするならば、この「一紙小消息」の世界から「一枚起請文」の世界へと移ることは、もう必然的なことであつたと思うのです。

そして、その転回点が、法然上人の六十三歳のときの、この「津戸の三郎」の疑問の言葉であつたと思うわけです。

ですから、「前期法然」で捉えようと、自力的なおいが残るけれども、「後期法然」で捉えれば、全く他力浄土の念仏の思想がはっきりすると思っております。

そういうことで、私は、冒頭にご紹介いただきましたが、「法然の思想、親鸞の実践」という本で、そのことを公にしたいがために著したといつていいかと思います。

したがって、この「前期法然」、「後期法然」という分け方を、法然上人の思想、信仰これから考えていく上では、はっきりさせていくことによって、法然上人は革命的な、全仏教の歴史の中で、あるいは、宗教史の中の「巨人」、「革命家」であつたことが確信できると思っております。

そして、梅原先生は、「ヨーロッパの宗教改革のマルチン・ルターにも匹敵する」と、最近おっしゃっていますが、私は、ルターよりも法然上人のほうがすばらしいと思っております。

しかも、ルターの宗教革命よりも400年も前に、法然上人はこの専修念仏の思想、教

えを提唱されたわけですから、全世界の宗教史の中でも、法然上人は筆頭に位置する、宗教改革、宗教革命を起こした方であると思っております。

そして、その教えを受けたのが親鸞聖人ですが、時間がありませんので、少しだけお二人の関係を申し上げます。

法然上人は一つの問題を抱えていました。それは、どのような者も念仏一つで浄土に往生できる、助かるとおっしゃったけれども、法然上人ご自身は、戒律を生涯守られました。受戒堅固（？）の僧でありました。清らかな僧と言われますが、そうすると、疑問が生じます。その疑問を提示したのが、実は、九条兼実なんです。それを読みます。

「問ていわく、聖人の申す念仏と、在家の申す念仏と、勝劣いかん。答ていわく。聖人の申す念仏と、在家のものの申す念仏と、功德ひとしくして、またくかわりめあるべからず。疑ていわく。この条なお不審也。そのゆえは、女人にもちかづかず、不浄の食もせずして申さん念仏は、たと（貴）かるべし。朝夕に女境にむつれ、酒をのみ不浄食をして申さん念仏は、さだめて劣るべし。功德いかでかひとしかるべきや。答ていわく。功德ひとしくして勝劣あるべからず。そのゆえは、阿弥陀仏の本願のゆえをしらざるものの、かかるおかしきうたがいをするなり。（念仏往生要義抄より）

これは、法然上人が抱えた一番の問題だと思えます。

これに対して、親鸞は、二十九歳のときに比叡山を下りて、法然上人の弟子になりました。その年の秋に、この質問を九条兼実から受けて、こういう答えをおっしゃったわけ

すが、「では、出家の弟子を選んで、私の娘と結婚させよ」と九条兼実から迫られたわけです。

そのとき、法然上人は、「わかりました。それはよい考えです」とおっしゃって、その当時、入門したばかりで、「綽空（シャククウ）」という名前をもらっていた親鸞に、「綽空、あなたが兼実公の命に従って結婚しなさい」と言われたのです。

そのあたりは「親鸞聖人正明伝」という伝記に詳しく書かれています。泣いて断ったということ。墨染めの袖を濡らして、泣いた」と書いてあります。

そうすると、法然上人は、親鸞が、その前に、「六角堂で、観音菩薩から結婚を許可する内容の夢告、夢のお告げを受けている」ということを知っていたので、「そのお告げに従って結婚せよ」ということで、親鸞は泣く泣く結婚に踏み切ったわけです。

その相手が九条兼実の娘の「玉日姫」で、九条家の別邸が五条西洞院にあつて、そこが新居となりました。

そして、三日後に吉水に二人で挨拶に行きました。そうすると、法然上人は、奥さんの「玉日姫」に向かつて、「よき坊守（ボウモリ）が誕生したぞ」と、祝福の言葉をかけられました。

これが、浄土真宗で「坊守」という言葉が使われ始めるといふ、「坊守縁起」というわけ。です。

浄土真宗以外は、お寺の住職の奥さんは、大黒様とか「お庫裏様」とか、「寺庭婦人」という変な言い方で言われていますが、浄土真宗だけが「坊守」という形で、この二人が

いることが本来であるということを、法然上人は祝福されたわけで、公認されたわけですから、こういう言葉を使われたということは、肉食、妻帯の生活のままに念仏を申なば、浄土へ往生できるんだということになるといいと思います。

もちろん、親鸞聖人は結婚したくはなかったのですが、法然上人が、六角堂で受けた夢告を取り上げて、「結婚せよ」と言われたので、やむを得ず結婚したわけですね。

ただ、結婚してから四年後に、この結婚の意義に気づいて、「綽空」を「善信」と改名することにされたのですが、この親鸞聖人の結婚によって初めて、歴史上に大乘仏教が具体的に姿をあらわしたということができると思います。

法然上人の教えだけでは足りなくて、法然上人が結婚されていれば、法然上人ご自身で大乘仏教を誕生せしめたと言えるけれども、当時の状況で、法然上人が結婚したら、これはもう、吉水は存続することはできなかったと思います。

親鸞聖人だって、結婚したことによって、法難のときは、当時、「死罪」という声が強かったのです。「親鸞も死罪だ」ということだったのですが、朝廷の会議の席に、親鸞一族の日野家の貴族が一人いて、「死罪はかわいそうだから、流罪にしてはどうか」と主張したおかげで、流罪になったということです。

法然上人と式子内親王とのプラトニックラブという話は、ご存じの方もあると思いますが、そういう女性との交流はあったけれども、結婚に踏み切っていたら、徹底した弾圧が下されたことと思います。

ですから、法然上人は結婚しなかったけれども、その結婚という課題を親鸞聖人に委ね、

親鸞聖人はなくなく結婚したけれども、そのことによって、「なるほど、ここに大乘仏教は誕生した。いつでも、どこでも、誰でも、念仏一つで助かる」という道が開かれたということが、親鸞聖人は四年後に納得することができたということです。

ですから、私は、肉食と、妻帯ということによって、法然上人と親鸞聖人の、今というコラボレーションですね、共同作業、車の両輪のようなお二方によって、歴史上に初めて大乘仏教が姿をあらわしたという、革命的な出来事が成就されたと言っていると思っています。

佐々木正

長野県塩尻市 真宗大谷派 萬福寺前住職
草愚社主宰 季刊『法然思想』代表
『親鸞始記』『親鸞再考』など著書多数

寺院紀行

港区・虎ノ門

天徳寺

文・撮影／真山剛



天徳寺山門。東京オリンピック後に本来の山門位置、虎ノ門ヒルズ側に移すかもしれないとのことだ。

「自分の目線からだ、ちょうど蓮の台座の上にお像の法然上人が座られている、その位置関係を最初から最後まで保ちながら立って座ります。法然上人をお乗せする蓮華座つきの特別な持蓮華（柄香炉の香炉部分が蓮の台座になっている）を持つ時、両脇を開けて肘を張った状態、そして顔も伏せません」

と読んで、この立ち居振る舞いが想像できる人は読者の浄土宗僧侶でもほとんどいないだろう。これで「ああ、こうね」とピンとくるのは、京都の四箇本山、つまり総本山の知恩院、大本山の知恩寺、金戒光明寺、清浄華院で御忌法要の唱導師を務めた僧侶とその僧侶を指導する僧侶だけに違いない。本誌の読者の7割は増上寺管轄地域（北海道から中部まで）の上に本誌の四月号のバックナンバーを開くと、この寺院紀行に登場いただいている寺院は大本山増上寺で御忌法要の唱導師を務めた寺院だけで、京都の総大本山の御忌唱導師務める住職は初登場だからである。

さて、その初登場の住職は江戸四か寺のひ

とつ、東京は港区虎ノ門にある光明山和合院。天徳寺の第四十九世、藤本泰史住職である。この天徳寺、東京を代表する名刹のひとつで、インターネットで検索すればその由緒や格式の高さに関する情報が溢れ出てくる。

その初登場の藤本住職がこの四月二十一日に務める京都の御忌の話に戻そう。

御忌とは浄土宗を開いた法然上人の年忌法要で全国の浄土宗寺院でも行われるが、浄土宗の八大総大本山では数日に亘り行われ、本来はその本山の猊下または台下と呼ばれる住職が務める導師を一般の寺院の住職に特別導師として務めてもらう法要で、年中行事の中でも最も大きな法要になっている。この御忌、かつては法然上人の往生した日、いわゆる命日である正月二十五日だったが、諸事情より今は各総大本山とも四月に行っている。

関東と関西ではお経の称え方や座り方、柄香炉の掲げ方など、その威儀作法が異なるといふ。実際の本番では、関東は侍者という僧侶がいつも隣にいてくれて、威儀作法などを

忘れると小声で助言してくれるという。一方、関西では導師は最初から最後まで一人で全てこなさなくてはいけない。そして、清浄華院は京都の本山の中でも法要の時間が最も長く、威儀作法も一番多いという。

清浄華院でこの御忌の唱導師の威儀作法を教えられている僧侶に話を聞いた。

「関東から来られると、威儀作法の多さに驚き放心状態になられます。ですが逆に決まり事ですから、習礼（練習）を重ねればどなたでもこなせます。修正が不可能なのは音程ですな」ということだ。なるほど、音感を一朝一夕で直すのは無理だろう。

また、かつて清浄華院で唱導師を務めた東京の僧侶に伺ったところ、独特の節回しも、焼香の作法も一度覚えれば、逆に問題がないそう。むしろ細かい事が決まっていらない関東の方が、教える先生の癖が出たりして大変との事だった。なるほど一理ある。増上寺の御忌はこれまでの寺院紀行の取材で何回か拝見させていただいたが、一度関西の御忌を見

て、その違いをこの目で確認したいものだ。

さて、こうして関西と関東とだいぶ違うような威儀作法や読み方だが、それでも関西の本山が関東の僧侶に唱導師を務めてもらうのはなぜだろう。これも清浄華院に聞いてみた。

「最初に東京のお寺さんに唱導師としてお出ましいただいたのは、平成十二年に群馬県の安楽寺の大田秀三住職が当清浄華院の法主になられた三年後の平成十五年、東京・世田谷・大吉寺の成田昌憲住職です」

なんと、本誌の今年の一月号で取材させていただいた成田住職だった。

「以来、東京、神奈川、長野、茨城など関東のお寺さんにもお務めいただいています」

もともと清浄華院は北陸を基盤とした本山という話を聞いたことがあるので、参考までに平成になってからの唱導師の県別人数を調べていただいた。それを整理すると……。

県別では、京都十一人、福井十人が抜きん出ていて、次に東京と長野が四人ずつ。

地域別では関西二十人、北陸十四人、そし

江戸時代中期の儒学者で、画家で篆刻家でもあった高芙蓉の墓（右）。日本における印章制度を確立したことから印聖と讃えられている。



て関東と中部が八人ずつ。中国が三人、九州と海外が一人ずつだった。そして今年は二人とも東京のお寺さんとのことだから、関東へ比重が高まっているということか。

そして四月二十一日の日中法要を務めるのが藤本住職で、取材は二度目の習礼で京都に向かう前日となった。御忌への意気込みを聞くと、一月の最初の習礼で、その作法の多さ、読み物の独特の節回し、そして長時間の正座に驚き、京都から自分の寺に戻るや否や、威儀作法や読み回しの練習を始め、くつろいでテレビを見る時も正座をするようにしているとのことだった。こうした話の中で冒頭の持蓮華の話になったのである。

最後に、唱導師として法然上人への思いを伺ったが、今は習礼で頭が一杯で上人への思いはまだありません、とのこと。確かに直前まで続く習礼が終わり、威儀作法に慣れて迎える御忌当日、蓮座にいらっしゃる法然上人を仰ぎ見ながら法然上人への思いが湧いてくるに違いない。

さて、天徳寺の本堂、巻頭カラー頁をご覧ください。八角形の本堂である。先代藤本泰弘住職が平成十七年五月に落慶した新本堂で、大正十二年の関東大震災で本堂を全焼して以来の悲願の再建となった。

この新本堂、現在の愛宕山側にある山門から見ると左手奥になる。しかし、実は現住職が考えている境内整備では山門の位置を変えるのだが、その山門を入って右手となるように先代が建てているのだ。

今度は巻頭カラー頁の古地図を見ていただきたい。愛宕山の西側に沿った天徳寺の境内は南北に細長い。創建当時の山門は現在の虎ノ門ヒルズ側、つまり江戸城側になり、今も残る塔頭寺院が挟む道が参道だった。つまり本来の北側に山門がくると新本堂は右手となる。ではなぜ右手にしたいかという理由だが、天徳寺の実際の開山は第二世の称念で、称念は捨世派という浄土宗の中でも念仏修行に特化すべきと提唱した一人で、捨世派の伽藍配置の特徴が山門を入って右手に本堂が位置す



過去帳である諸家霊名簿の表紙と目録頁。諸大名の江戸での菩提寺であったことを今に伝える天徳寺の貴重な史料である。

るからである。

この天徳寺、天文二（一五三三）年に増上寺第七世周仰上人を開山、木内宮内少輔を開基として、称念が江戸城紅葉山に天智庵という寺号で創建した。およそ二十年後に後奈良天皇から光明山天徳寺の勅額と紫衣編旨を賜り、天正十三（一五八五）年には霞が関に移転、そして慶長十六（一六二二）年に現在地、当時の芝西久保に移り、翌年には二代將軍秀忠公から朱印五十石を賜っている。

しかし、火事と喧嘩は江戸の華というが、江戸時代に火災で焼失すること四度、明治時代に一度、そして大正の大震災と、焼失再建の歴史を繰り返している。取材時に拝見した本堂落慶記念パンフレットの表紙が見事な深紅色だったのだが、先代はこの色にこうした歴史を重ねたのか、とは少々うがち過ぎか。

さて、八角の本堂が建つ境内に目を向けると、まず驚くのが寺を囲むビルが多さである。天徳寺の最寄り駅は虎ノ門と神谷町、ともにビジネス街だが、老朽化した虎ノ門のオフィ

スビル群はその敷地がまとめられ虎ノ門ヒルズのように高層ビル化している。虎ノ門ビルズと隣接するかつての天徳寺の参道も現在工事中、高層住宅をメインとする第二虎ノ門ビルズが建つという。

また、山門前の愛宕山側はかつての塔頭寺院が三カ寺並んでいたが、移転に伴いこちらも高層マンションになり、愛宕山の姿は見えなくなった。まさに四方にビルが林立しているのだが、その中であって多くの木々が茂っている天徳寺境内はまさに都会のオアシス。山門を入ると右手には大正・昭和・平成と仮本堂として活躍した大正十二年の建物で、現在は客殿として、天徳寺を江戸での菩提寺とした大名家の位牌と三十三観音の聖観音菩薩像が祀られている。その客殿奥には庭が広がり、新本堂への渡り廊下がのびている。

山門を入って左手には港区で最古の石碑や有名人の墓、そしてこれも港区の名鐘指定の鐘楼、その奥に広くない墓所、そして大きな納骨堂が建っているのだが、納骨堂には十数

客殿の位牌櫃の左側には諸大名の位牌が今も並んでいる。



件の檀家さんが入っているだけという。

ということで、天徳寺の檀家は墓地、納骨堂を合わせて百余軒。かつては江戸屋敷に住む大名が天徳寺を江戸での菩提寺にし、法事を天徳寺と国元の菩提寺の両方で行ったという。つまり江戸時代の天徳寺を一言でいうと殿様寺。一般の檀家を取ったのは戦後だそう。納骨堂でも積極的に檀家はとっていないという。となると、かつての檀家の大名家も隆盛が現代まで続くとも思えないので、天徳寺を支えている経済基盤への疑問が生まれる。遠慮なく聞いてみると、境内地八千坪の四、五倍にあたる土地を貸しているという。つまり天徳寺を囲むビルの何棟かは天徳寺寺領の上に建っているということだ。

こう聞いて納得したが、実はこの寺領を貸すには苦勞が少なくないという。借り手が保護されるようになり、固定資産税にも満たない家賃あり、勝手に建物を又貸しする輩あり、許可なしでの増改築も少なくないという。まあ、持てる者の悩みといえればそれまでだが、

江戸時代の長屋の大家さんと店子のような「大家と店子」といえば親子のようなもの」とはほど遠い現代、こうした身勝手な店子対策として毎月賃料を集金しているという。まさにビジネス街にある大きな寺ならではの苦勞である。

最後に藤本住職の経歴を簡単に紹介しよう。昭和四十年天徳寺に生まれ、芝学園、大正大学浄土学と進み卒業後は自ら一般会社に就職を希望、二年間働いてから増上寺境内にある浄土宗の東京事務所に勤務。そこで机を並べた佐賀の浄土宗寺院の娘さんと結婚。お子さんは二年後には浄土宗の僧侶になる息子さんが一人。そして東京事務所勤務で浄土宗内に通じていたこともあり、二年前に浄土宗の宗会議員に。その宗会議員の縁で今度の御忌唱導師の大役を果たすことになり、ただいま清浄華院での御忌の唱導師を務めるにあたり猛練習中という略歴と今である。

四月二十一日は、藤本住職の習礼の成果を、そして関東と関西の威儀作法の違いを見るために京都へ行く。

(ルポライター)



かつての天徳寺の塔頭寺院のあった場所には高層マンションが建っている。手前の鐘は「武蔵野國江戸時代梵鐘拓影集成」に掲載される名鐘で、朝晩に江戸時代からの音を響かせている。

天上天下唯我独尊

(天の上にも天の下にも 唯だ我れ独り尊し)

(釈尊)

支えられているワタシ 支えているワタシ

世界は誰かの仕事でできている――。

イイですねえ。 いい！ スゴく、いい！

好きなんです、このフリーズ。失敗したとき、自分の能力の低さを感じたとき、思い起こしては自分を励ましています(笑)。これ、某飲料メーカーの缶コーヒーCMのキャッチコピー。このコピーを使ったCMは2014年からスタート、シリーズ化しています。

このクダリに至るまでには前段があります。「作品」(もはや、そう呼びたい)の一つは、こうです。

◆営業マン「(鳶職人を見て) トビか…いいよなあストレスなさそうで」

◆とび職「営業か…いいよなあ楽そうで」

◆営業マン「しかしまあ、もしも俺がとびだったら…(高所作業で身震いしている様子を想像)…いや〜ムリムリ!」

◆とび職「もしも俺が営業だったら…(取引先に土下座しつつ喧嘩を売ってしまふ様子を想像)…てなるわなあ」

◆お互いに「あんたえらいな! 誰だか知らないけど」

飲み干したコーヒー缶をゴミ箱に捨てる時に鉢合わせ、お互いに「お先にど

うぞどうぞ」――。

インターネットで冒頭のコピーを打ち込んで検索すると、共感のコメントが次々とヒットします。共感する人が多いということは、「そうでないのはいか」と無意識にでも感じて人が多いことの証左かもしれません。

「オレって、なんかの役にたつてんのかね？」

「アタシ、この仕事して、なんになるんだろ？」

そんな問いかけが多くなされていることは、ちょっとネットを探れば明らかです。それだけ、自分自身の立ち位置が見失われがちな時代、とも言えるでしょう。直截的には「自信がない」ということにもなるのでしょうか。もちろん自信過剰はよくないとしても、そんなに自虐的にとらえる必要はない、そうも思います。

だって、「世界は誰かの仕事でできている」んですから。

世の中は「縁起」で成り立っている――お釈迦さんは言っています。すべての事象には何か「因」となるものがある、そこにありとあらゆる要素「縁」が複雑に関係しあつて成り立っている、そう捉えますね、仏教では。縁によって起こっているから、縁起。「ありとあらゆる要素」には、目に見えるものも

あれば見えないものもあります。だから、気づかないことも多い。というか、ほとんど気づくことはできません。でも、それでいいと思います。大切なのは、「わかり得ないけれども、そうした事実がある」ということを知ること。

「ワタシ」は、そうしたいろいろな要素に支えられて生きている。でも、決してたんに受け身のワタシなのではありません。「誰かを支えているワタシ」でもあるのです。もちろん、その「誰か」は、その人を支えているあまたの要素のうちの一つが「このワタシ」であることには気づいてくれはしないでしょ。それで、いいんです。「支えているワタシである」、その事実こそが尊いのです。

天上天下唯我独尊。

支えられ、支えている、一人ひとりの存在。その一人ひとりとは、どうあつても、他の誰とも替わることができません。だから「唯だ我れ独り尊し」。お釈迦さまの宣言文を、こう理解しています。

もう、春四月。はなまつりの季節だ。

(小村正孝)

江戸の川 を歩く

呑川

のみがわ

呑川は、桜新町近辺（本流）、駒沢近辺（駒沢、柿の木坂支流）、九品仏（九品仏川）からの湧水流が合流して江戸湾に向かう流れである。江戸の地形は、幾筋もの台地が襲のように江戸湾に向かって伸びている。呑川もそうした台地の谷合いを流れている。そして今の昭和島辺りで江戸湾に注ぐ。江戸の南を江戸湾まで流れる川は、上から古川、目黒川、立会川、呑川、そして多摩川となる。多摩川から先は江戸圏外、相模国となる。

第十九回

森清鑑

江戸ウォーカー

江戸時代、この呑川の清流は、当初、貴重な農業、灌漑用水、飲料水、生活用水として使われ、後には江戸湾に豊富な養分を流し、有名な大森海苔の隆盛をもたらした。また、川メダカ、ドジョウ、フナ、ウグイ、手長エビなどの水生生物の宝庫で、夏ともなれば蛍が飛び交い、ヤンマが飛ぶ、正に、春の小川の感であった。

現在、呑川はほとんど緑道化され、都民の散歩道となっている。現在の流れは（大岡山、東京工大から東京湾）、浄水所からの引き水で、コンクリート堰堤に囲まれ、東京湾に注いでいる。

呑川本流

呑川本流は、今の桜新町付近を水源とする。江戸の大山道は、小高い丘の上を走っており、大山詣の人々は、富士山や丹沢連山、西端の大山を眺望しつつ歩いたのである。

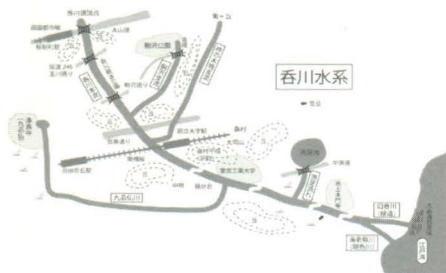
呑川源流は、この大山道付近から南へと丘襷を縫い、深沢の湧き水を加え、下へと流れている。その先、なかなか丘の谷間を流れ、国道246玉川通りを突っ切り（これも大山道）、日本体育大学の脇を通過、駒沢通りに向かう。玉川通りと駒沢通り間は、今、呑川親水公園となっており、数々の水生植物が花を咲かせ、鴨が泳いでいる。水生生物はいない。というのも、浄水場の処理水を引いて循環して流しているからである。親水公園の先は今や緑道化され、全体あちこちに桜並木があり、花をめぐる名所と化しているが江戸期の呑川の流れは、なかなか丘に挟まれた中を流れるような光景。竹林や田畑が多くなり、東横線都立大学駅の南側に出る。この辺りで二本の呑川支流が加わる。

呑川駒沢支流

江戸時代、駒沢は広々とした丘であり、ところどころに林がある自然の風景。連なる丘では、馬（駒）の飼育も行われていた。駒沢という地名は明治になって上馬引沢村、下馬引沢村、深沢村などの沢と駒（馬）の合成語。今の駒沢公園、オリンピック競技場辺りから流れ出た湧水が南に下り、畑の道に架かる衾橋を潜り、八雲を抜けて前述の呑川本流にTの字にぶつかる流れを呑川駒沢支流という。

呑川柿の木坂支流

東急田園都市線駒沢大学駅の南、上馬、東ヶ丘辺りから湧き出た水が緩やかな丘の底を通り、都立大学駅南で本流に注ぐ。これが呑川柿の木坂支流である。江戸時代、丘の斜面は畑で、その底を川は流れ、さながら春の小川の感であった。ここも水生生物が豊富で、ヤ



シマが飛び、昭和になっても処の人々が野菜を洗い、ドジョウを捕っていた。今は緑道化され、道の両側には、種々の木々が豊富に植わり、平坦な散歩道。両側を見ると、柿の木坂やら坂になっているが、これが昔の丘の名残。この川は江戸期、挟れた底を流れ、所々では、土手の底を流れている感があった。この流れが、田畑をぬう縫う平坦な流れとなり、やや下って右に折れ曲がり、呑川本流に合流していた（都立大学駅側）。

江戸時代この辺り一帯は、衾村で都立大学駅から大岡山にかけての地名は衾村平根。つまり台地の平らな縁部。今の平町の語源であろう。平町から駅を見下ろすと呑川が谷底を流れている様子が分かる。本流と二本の支流を加えた呑川は、大岡山方面に流れる。左右を見ると平たい丘が迫り上がっている。途中、右側に迫り上がった丘が中根。東京工大に達する現在の緑道は、桜の名所でもある。そしてこれから述べる九品仏川が右手から合流してくる。

九品仏川

田圃から小高い丘になり、鬱蒼とした森。これが奥

沢村、浄土宗浄真寺。この寺は、江戸っ子にとっては、九品仏でお馴染み。雪旦の江戸名所図会では、田圃沿いの参道（両側は家が立ち並ぶ。自由が丘駅から九品仏へ）に大勢の参拝客が歩いており、民家が建ち並んでいる。参道は左に折れる。すると、正面に、格調高い山門が聳えている。山門の左側一帯に、つい最近まで天然の鶯草が咲き乱れる神秘的な庭があった。山門を潜って境内に入ると左側に大鐘楼があり、右側に方丈。前方に大銀杏が目立ち、その背後に三つのお堂がある。これが九品仏として名高い、上中下品の阿弥陀如来様。立派な本堂が右側に控えている。境内の周囲は土塁に囲まれており、室町時代、ここが吉良一族の砦であったことを示す。境内のあちこちに古木が立ち並び森閑としている。この広大な寺域の西側を流れている小川が九品仏川である。江戸時代、浄真寺の背後に九品仏池という湧水池があり、流れ出した湧水が小川となったものである。江戸の参詣客は、池と流れの周囲に咲き乱れる鶯草、自然の神秘的な光景に酔いしれた。今や池はなく、水はほとんど涸れているが木道などの散歩道があり、当時の面影を残している。この

流れは田畑を縫って自由が丘駅の方に向かう。江戸期にはこの流れの周囲にも鶯草があった。悲劇の常磐姫が鶯草になったという伝説もあり、白鶯が飛翔する姿にも似たこの花は、世田谷区の区花となっている。

緑道伝いに読み取れる流れは、自由が丘駅の側を通り、古社の氷川神社の手前を走り、やがて左に折れ、緑が丘で呑川本流に合流する（東京工大）。

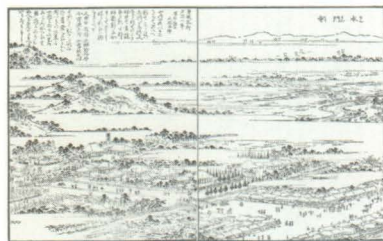
江戸湾までの呑川の流れ

現在のコンクリートの河川がここから始まる。この流れは浄水場の高度処理水を引いたもの。昔は川の両側を見ると緩やかな丘が連なっており、その谷間を呑川が走っていた。やがて中原道に出る。ここに石橋が架かっていた（石橋供養塔の碑）。流れはさらに東へ進む。すると左側から別の流れが入り込んでくる。これが洗足流れ。中原道に面する洗足池から溢れた水が呑川本流に繋がる。今でも途中まで存在し、コンクリート川の両側には木々が立ち並び、その一部で蜚の飼育などが行われている。

本流はやがて池上本門寺前を通過。流れの左側、平

地から盛り上がる丘全体が寺領。日蓮宗の名刹で日蓮が荼毘にふされたこの広大な寺は、徳川家の擁護も受け、大伽藍を残した。国の重要文化財「五重塔」は、秀忠の乳母、正心院が秀忠の病氣治癒の御礼として建立した。江戸時代の梵鐘は、加藤清正の娘で紀伊徳川家初代頼宣の妻、瑤林院の寄進。紀伊徳川家の墓所、細川、上杉、西条、松平家、徳川吉宗の側室の墓。水戸徳川家の墓所、前田利家、加藤清正室の層塔もあり、総門の扁額は、本阿弥光悦の書、徳川家抱え絵師、狩野探幽等の墓もある。

呑川は、この本門寺の前を蛇行しながら流れる。この辺りに来ると、見渡す限りの田畑を縫うのどかな流れ。やがて広重も描く、梅屋敷の南を通り、糎谷（京急蒲田駅先）で二つに分かれる。上の流れが江戸期の呑川の流れて、海に注いでいた（緑道化）。下の流れは、昭和期に掘削されたもの。これが現在の呑川となっている。



◆本門寺：江戸名所図会：寺の前を

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第八十六回

第三部

充実と稔りの白秋へ

帰朝歓迎会で決意も新たに



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校（現芝中・高校）、同本校（現・大正大）へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、バーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリア人ハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティ口力の存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号を取得して帰国、一人異郷に残された海旭は母トナと導きの師・端山海定逝去の悲報に耐えながら、博士号を取得するも宗門から給付金を打ち切られる。そこで東大教授・姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるが断られ万策尽きたところへ、ドイツ駐節日本大使の珍田捨己から援助の手が差し伸べられ、海旭は悩んだ末に相思のドイツ女性の勧めを受け入れ、シベリア鉄道経由で帰国の途へ。途次奉天で新仏教運動で知り合い今や満蒙の地で外交官となっている北条大洋と再会、大アジア主義に共感を覚える。

大連から神戸へ安着

さて、わが渡辺海旭は、十余年にわたり異郷で修養を積み終え、ついに帰国の途について。読者諸賢にはかくも長きにわたってお待たせをしたことに寛恕を乞い願うとともに、いよいよ、彼の地で手に入れた多様な果実の種子を母国で豊かに実らせんとする海旭の人生の総仕上げたる「第三部」へと舞台を移し、筆を進めるとしよう。

シベリア鉄道経由の帰国の途次、奉天でかつて新仏教運動の同志であった北条大洋と十余年ぶりの久闊を叙した海旭は、北条から「大アジア主義」という心ゆさぶられる「餞別」をもらうと、鉄路で大連へ向かい、そこから大阪商船が五年前に就航させた定期航路の客となった。

二泊三日の短い船旅だったが、それは海旭にとって、X嬢と永訣するにあたって彼女と約した帰国後の「使命」を反芻する思慮深く

も濃密な時間となった。

すなわち、一つは「小乗」が正系の仏教だとされている欧州に向けて日本より「大乘」を発信浸透させること。二つは、ドイツに学んで日本でも女子教育の充実をはかること。三つは、近代化のなかで落ちこぼれた貧しい人々を救済する事業を起こすことである。

さらに、ドイツ駐劄日本大使の珍田捨己からは、宗門の意向として、翌年に控える「法然上人七百年遠忌事業」に海旭の舶来新知識を役立てること、そして、かつて珍田が英語を教えていた母校・浄土宗東京支校が国の認可を受けて一般の師弟も学べる中学校（現・芝中高校）になったので、その校長を引き受けるという、二つの使命が伝えられていた。

これにもうひとつ、北条から触発をうけた「アジアの民草の救済安寧」をめざすという『侠客坊主』としての課題が加わった。

胸中にふつふつと沸き起こってきたこれら

「帰国後の使命」を、さて、これからのような順番でどう形にしていくなべきか、あれこれ思案しているうちに、いつしか船は馬関海峡から瀬戸内海へと入り、神戸港に投錨・接岸していた。それから、怒濤のごとく押し寄せてくる歓迎の対応に追われて、当面は「帰国後の使命」についてじっくり思案するどころではなくなった。

それらに整理をつけ「使命遂行」の優先順位を決めるきっかけを与えてくれることになるのは、実は帰国してから二か月後に起きる天皇暗殺未遂といういまもなお日本の近代史に大きな翳を落としている歴史的大事件だと筆者は睨んでいるのだが、もちろんこの時点で海旭自身がそれを知るはずもなかった。

雲来とは対照的な出迎えぶり

「怒濤のごとき歓迎」と記したが、十余年も異郷に在った人物の帰朝を祝うそれとは大いに趣きを異にしている、それがまたいかにも

海旭らしかった。

「浄土教報」（四月四日付け八百九十七号）には「渡辺師歓迎会」の小見出しのもと、「着京期日未定の為め予定は変更せられ、縁山御靈殿に於て執行せられたり」と前振りをした上で、その経緯が次のように記されている。

三月二十三日神戸港に安着した海旭を出迎えてくれたのは、妹のもと子が嫁いだ相手の大島泰信（武田泰淳の父親）一人であった。

二人は、四年前に東海道本線に登場した食堂車と寝台車を連結した神戸発の最急行列車に乗車、十三時間弱をかけて一路、東京へ向かったと思われるが、箱根の山を越した国府津駅では、ほぼ同時期にドイツに留学し五年前一足先に帰国した荻原雲来が、ついで大船駅では浄土宗東京支校で雲来と共に三羽鳥といわれた良きライバルの望月信亨と宗門の宗務代表らが、さらに横浜駅では海旭が住職をつとめる西光寺の檀家総代が、そして終着の新橋駅では多くの知人たちが出迎えてくれた。

そして、その足で大本山増上寺へと向かい、御靈殿での歓迎会に臨んだと記事は伝えている。いったい全体、この「五月雨的な出迎えぶり」はなんだろう。

記事の書きぶりからすると、おそらく海旭は奉天が大連あたりで身内の大島だけに帰着の詳細をぎりぎりで知らせ、大島から連絡をうけた関係者は急なことなのでそれぞれ予定を調整して間に合う場所へ取るものもとりにあえず駆け付けたという状況を示しているのではないだろうか。

いっぽう、宗門にとつては、海旭を「要人」として迎えるにあたってはしるべき儀礼を整えなければならず、そのためには準備期間が必要なのに、さっぱり予定が立たずどうしたものかと戸惑いと苛立ちを覚えたはずである。

記事にある歓迎会の次第にもそれはあらわれている。

野澤第一宗務所長が発起人を代表して開会

を宣言、参会者一同から安陀会一肩が贈呈されると、海旭は素絹如法衣姿で登壇、「己の今日あるは仏祖の冥鑑は素より、宗内寺院諸師の扶宗心の賜物なりと感謝の意を表すると共に、此歓迎会に臨む資格なき己も自己の懺悔の爲め且つは宗内一致団結、信仰心喚起の好機会を得ること信じ罷り出たり」と挨拶、その後、野澤所長の発声で「渡辺海旭師への万歳を三唱」、これに應えて海旭も「浄土宗並びに東京寺院の万歳を三唱」、海旭の先輩にあたる土川上人の唱導のもと十念を唱和して、散会。参会者は僧俗あわせて二百余だったという。

やはり、なんとか対応したゞにわか仕立てゝ感はいなめない。

ちなみに五年前に帰朝した萩原雲来にも歓迎会が用意されたが、その周到ぶりとは対照的である。

二か月の船旅で無事横浜に帰着した雲来の帰朝歓迎会は東京では二度も催されたが、そ

のうち両国回向院での様子を「浄土教報」(明治三十八年十月二十三日付け六百六十六号)はこう伝えている。

——来会者百三十名超。三十五におよぶ祝歌・祝辞をうけると、成田屋良坊、三遊亭右円次の落語、奇天斎栄一の手品などの余興が座を盛り上げる。そして閉会では雲来を胴上げして一同で万歳を唱和。三々五々会場を後にする来客たちは、少年音楽隊の奏樂と、「歓迎」の文字を独英仏三か国語で描いた提灯で見送られるという絢爛ぶりであった、と。

まさに国賓待遇並みの遇され方である。

これに対して海旭の場合は、形式張ることを嫌う彼らしさが見事にあらわれている。

なお増上寺での歓迎会を終えた海旭は、帰朝の疲れもものかわ、西光寺で一休みすることもなくそのまま檀家の通夜の導師をつとめたと同寺の現住職の古宇田師から伺ったが、これまた海旭の「俠客坊主」ぶりを示すエピソードといえるだろう。

(つづく)

さっちゃんねネッ

かまち♡ひろう



編集後記

桜舞う境内を行く御忌の僧

岱潤

ある本でこんな話を見つけました。

友人がメキシコを訪れたときの話で、人影のない海岸を歩いていると、遠くの方で男の人が何かを拾っては海に投げ入れていた。よく見てみるとそれはヒトデだった。彼はヒトデを一つ一つ拾っては海に投げ入れていた。不思議に思っ友人は彼に訊いてみた。「何をしているの」「引き潮で打ち上げられてしまったヒトデを海に帰してやっているのさ。こうしないと、ひからびてしまうからね。」「そりやそうだけど、この海岸だけでも何千というヒトデが打ち上げられているじゃ

ないか。全部なんて無理な話さ、ほんの人握りのヒトデを助けたって、何にもならないと思うがなあ」

これを聞いた男は白い歯をニツと笑うと、友人の言葉などお構いなしにまたヒトデを一つ拾い上げ海に投げ入れて、今海に帰してやったヒトデは、心から喜んでいるさ」と言うくと、また一つヒトデを拾い上げ、海に向かって投げ入れていた。

この文には、『百万分の一のいのち』という題がついていました。全てのヒトデを救えないのだから、その行為は無意味であり、わずかなヒトデだけ救うのは不公平であるというのでなく、一匹のヒトデが心から喜んでいるのであれば、人

としてすばらしい行為であると思うのです。自分の力を使うとき、先ずは自分に出ることをすることが大事だと教わった気がしました。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十四巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成二十年三月二十日

発行 平成二十年四月一日

発行人 佐藤良純

編集人 長谷川代潤

印刷所 株式会社 晩印刷

千一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑑印会

電話 〇三三五七八六九四七
FAX 〇三三五七八七〇三六
振替 〇〇一八〇八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(日黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。

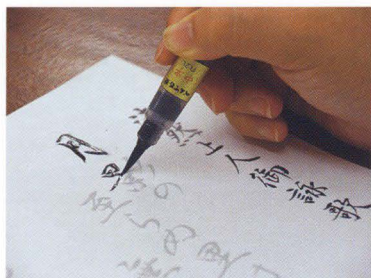


薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。